
竜に愛されし鎮め姫

春秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜に愛されし鎮め姫

【Zコード】

N8488B

【作者名】

春秋

【あらすじ】

竜が支配する世界。誰もが竜に怯え暮らす世界。人は己の罪を忘れ竜を怖れ、憎む。竜は狂い、元凶たりし人間を憎む。唯一竜に愛されし少女は世界を旅する。1/21「悲しき涙」を大幅改訂しました。

尊（前書き）

他の話を更新しないのに新しく初めてしました。
少しでも楽しんでくださいれば幸いです。

優れた知恵と永き寿命。巨大な体を覆う硬い鱗。鋭い爪。甚大な魔力。

世界を支配するのは、強大で残酷な竜。
時折、人里に降りては癒えぬ傷痕を残して行く。
幾多の者が竜に挑み、死を迎えた。

人が逆らうなど愚かだというように。

残酷な死を。

人々はただ怯え、祈ることしか出来なかつた。

どれだけ国が発展しようとも、竜の脅威が消えることは、ない。

どれだけ力のある精霊使いも竜を追い払うのが精一杯だ。

ある時、噂が流れた。

竜を従えし少女がいる、と。

どれ程凶惡な竜も少女さえいれば、おとなしくなる、と。

人々は、嘘だと一笑にしながら、密かに真実である事を願つた。

噂（後書き）

人は短命故に過去を忘れ、己の罪を忘れる。

絶望（前書き）

一話目です。今回は割りと早めに更新出来ました。
感想をお願いします。

絶望

町を焼く、炎の海。

つんと人の焼けた臭いが鼻をつく。

吐氣を必死に堪えながら、少年は町を走っていた。

「母さん、父さん、ヒナー」

幾度も咳き込みよろけながら、足は止まらなかつた。
なんで、こんなことになつたんだろう。

頭の中はそればかりがよぎる。

今日は、デイルカの町の祭りの日だつた。

竜に怯えながらもなんとか一年分の収穫が得られたことを喜ぶ収穫祭があるはずだつた。

祭りの日に母親と妹に花を渡そと少年は決めていた。少し貧しい少年の家では、収穫祭の日でも身を飾る美しい服も飾りもなかつた。だから、花で飾りつけようと決めていたのだ。
町から少し離れたところに少年だけの秘密の花畠があつた。

朝早く、まだ薄暗い朝霧の中、花畠を目指したすらに走った。花畠に着いた時は既に日が昇り、辺りを照らし出していた。

朝霧が日に照らされ、幻想的な光景が目の前に広がつていた。
しばらくの間、田の前の光景を眺めたあと、周りがずいぶん明るくなつたことに気付き、我に返つた。

「しまつた、急がないと祭りに間に合わなくなる」

慌てて綺麗な咲きかけの花だけを選び出し、家からこつそりと持つてきた籠を一杯にした。

籠は歳の割りに小柄な体には重かつたが心は軽かつた。

これで母さんとヒナを飾つてやれるな。

父さんには怒られるだらうけど、母さんとヒナは喜んでくれるだらうから、いいや。朝走つた道のりを今度は花を落とさないよつて歩いた。

頭の中に花に喜んでいる母親と妹の笑顔が思い浮かび、自然と足並みが早くなつた。

町まであと少しあとで異変に気付いた。

町から幾筋もの真つ黒な煙が立ち上つていた。収穫祭で賑わつているはずの町から、歓声も賑やかな声もしなかつた。

嫌な予感が胸の中をよぎり、消えない。

「母さん、父さん、ヒナ」

籠を落とした事にも気が付かず、町に向かつて走り出した。

頼む、間違いであつてくれ。俺の勘違いであつてくれ。

「あつ、母さん、父さん、ヒナ」

荒い息遣いの中、ようやくたどり着いた町は炎の海だつた。呆然と瓦礫の山とかした町を目にし、止まつていた足は一步、一步と頼りなく歩みはじめた足取りは、やがて家に向かつて走り出した。

カラア、ン。

不意に後ろの方で音がした。

その音は妙にはつきりと聞こえた。

ひつきりなしに響き渡る建物が焼き崩れる音すら、耳に入らなかつたといつて。

足を止め、ゆっくりと後ろを振り返つた。

田の前に見えたのは、濁った深紅の鱗に隙間なく覆われた、巨大な竜。

予想が当たつことに絶望した。

竜に襲われた町で生き残つた者はほんの一握りに過ぎない。

必死に足を動かそうとしても、恐怖と疲労で動かない。

濁つた黄色の瞳に睨まれ、田を反らす事も出来ず、凍りついた。

大きく開かれた竜の口から赤い炎が見え、死を覚悟した。
これで母さん達のところに行ける。

絶望の中、その思いだけが溢れ、ゆっくりと田を閉じた。だが、熱

く身を焦がす炎はいつまでたつても襲つては来なかつた。

不思議に思い、恐る恐る田を開ける。

そして、田の前に、竜との間に立つ少女を見つめた。

絶望（後書き）

かつて犯した罪は消えることなく、人を苛み、新たな罪を犯させる。

竜鎮め（前書き）

久しぶりの投稿です。待つて下さる方がいらっしゃつたら嬉しいです。出来たら、感想をお願いします。

「駄目よ、竜。やめなさい」

優しい凜とした声が辺りに響いた。

紺色の長い髪と純白の膝まで被う上着が熱風にあおられ、なびく。巨大で残酷な竜を臆することなく、深みのある藍色の瞳が見据える。

「竜、竜。私の愛しい竜」

少女は少年を振り返る事なく、愛しげに悲しげに落ち着かせるように繰り返し何度も竜に囁き続ける。

ぺたり。

死ななかつたことにぷつりと緊張の糸が切れ、少年の足から力が抜け、座り込んでしまった。

同時に目の前の光景が信じられず、目を見張る。

人など塵としか思わないはずの竜が、たつた一人の少女に頭を下げているのだ。

有り得ない光景に、少年はたたたたほうけたように逃げる事すら思いつかずに見続ける。

ふと真っ白な頭の中に幼い妹の声が響いた。

「あのね、お兄ちゃん、竜を従えし少女って知ってる？その人さえいたら、どんな竜もおとなしくなるんだって」

あの時、自分はそんなの嘘だと笑った。

そんな自分にぽつりと妹は呟いた。

本当だつたら、いいのにね。

ヒナ、笑つて『めん。あの噂は本当だつたよ。

そう、呴いたのを最後に少年の意識は遠ざかつていつた。

少女は細く白い腕を伸ばし、臆する事なくたやすく自分を丸呑みに出来る巨大な竜の顎に触れた。

「竜、私の竜。あなたに名を。邪なるものからあなたを守る名を。あなたの名は？」

ゆつくりと藍色の瞳を閉じ、竜の顎に口付ける。

「あなたの名は、椿」

高らかに名を告げた少女の声に名を『えられた竜は、歓喜の声を上げた。

辺りに響き渡る歓喜の声は地を揺らし、炎に焼かれるも未だ残つていた建物を全て崩壊させた。

氣を失つた少年の元にもいくつか大きな建物の破片が降り注いだが、いつの間にか現れた、二十歳程の青年に助けられ、無事だつた。

少女が静かにけれど嬉しさと優しさに満ちた穏やかな笑みを浮かべながら向けられた視線の先では、椿の姿に変化が訪れていた。歓喜の声を上げ続ける椿の体から、黒く濁つた煙の様な物がゆらゆらと沸き上がる。

けれど、沸き上がる端から真っ白な焰が飲み込む様に煙りを焼き消していく。

黒く濁つた煙の様な物が椿の体から沸き上がる事に、濁つた深紅の鱗が深みを増した美しい深紅に変わっていく。

濁つていた黄色の瞳も澄んだ金色に変わった。

金色の瞳に浮かぶのは、さつきまで浮かんでいた殺意ではなく、穏やかで豊かな知性を示す光。

濁つた黒い煙りが消え、次いで白い焰が消え後には、先程までの狂暴で残酷な竜の姿はなく、そこに残されたのは神々しいまでの威厳と清らかさすら感じさせる偉大なる竜の姿のみであった。

竜鎮め（後書き）

何故に竜は狂うのか？

願いと決意（前書き）

またまた遅くなりました。
これからも気まぐれに更新だと思います。

願いと決意

穏やかな澄んだ金色の瞳が少女を見つめた。少女もまた臆することなく、椿を見つめた。

「…私が分かる？椿」

「いいえ。私には貴方が誰だか分かりません。ですが、私の魂はあなたが誰か知っています。あなたが信頼に値することも。どうか、あなたの名前を教えて頂けませんか？」

申し訳なさそうに恥じ入るようにうなだれながらも、乞うるように椿を見つめた。

「私は、セリナ。かつて祝福を受けし魂をこの身に宿す者」椿の様子に柔らかな笑みを浮かべた。

「セリナ様」

そつと己に刻み込むように「うやうやしく名を呼んだ。

「セリナでかまわないわ。様はいらないわよ、椿」

「ですが、あなた様は」

「椿、私は私よ。かつての私が犯した過ちを償つているだけ。」

「あれはあなた様の罪ではございません。愚かなる人間が犯した罪です」

今までとは違う強い口調で椿は怒りを露にした。

「椿。私も人間であり、罪の一端を背負っているの。今、それを覚えているのは、私だけ。それに、王を取り戻せるのも私だけ。そしてあなた達に取り戻してもらいたいのよ。偉大なるその姿を。それが私の唯一の望みであり償い。誰よりも優しく気高きあなた達を狂わせてしまったのだから」

なだめるような優しく悲しげな声。けれど、同時に声の中には強く凛とした響きがあった。

前を向くセリナから感じ取れる光を椿は嬉しげにまた眩しげに見つめた。

歓喜と共に。

「椿、今のあなたなら、行くべき場所が分かるわね。里についたら、名乗りなさい。それが鍵となるから」

椿は深々とセリナに頭を下げる。

「本当にありがとうございます。セリナ様のおかげで正氣を取り戻す事が出来ました」

セリナは軽く首を横に振る。

「私は大したことはしていないわ、椿」

「私にとつては、本当に助かってたんですね。それを否定しないで下さい」

諭す椿にセリナは笑みを浮かべた。

「そうね。ありがたく受けとるわ、椿。そうそう、皆に伝えて。あと、一十日ばかりしたら戻るからって」

「はい、分かりました。どうぞお元気で」

心配そうな椿に明るく笑いかけると、セリナは頷いた。

「気を付けるわ。あなたも気を付けてね、椿」

「はい。おかえりを楽しみにしています。どうかセリナ様をよろしくお願いします」

最後に深々とセリナの後ろに立つ人影に頭を下げるといい翼をゆっくりと広げた。

一度、二度と翼を動かすと大空へと舞い上がった。

「あなたに幸あらんことを」

去り行く椿を見つめ、セリナは呟いた。何かを堪えるように空を見つめ続けるセリナの名を冷たい声が呼んだ。

願いと決意（後書き）

少女の罪と人の罪。
償つべさせじあら。

仲間（前書き）

久々ですね。読んで下さる方、ありがとうございます。

「セリナ」

少女は自分を呼ぶ声にキュッと唇を噛むとさつきまで浮かべていた辛そうな表情を消し、振り返った時には明るい笑みを浮かべていた。

「なに？メノ？」

「生き残りはコイツだけだ。他は居ない」

一切の感情が込められていない声。

セリナの名を呼んだのは、20歳ほどの青年。

瞳は黒味を帯た深紅。

髪は金の混じつた燃える炎の様な紅。

鮮やかな色彩を纏いながらもどこか冷たい刃を思わせ、近寄りがたい雰囲気が漂う。

「そう。ありがとう、メノ」

悲しげな笑みを浮かべ、少年を見るセリナにメノは僅かに不機嫌そうにした。

「メノ、笑顔、笑顔」

突然、辺りに明るい声が響いた。

「ラン」

「ほら、セリナも笑いなさいって。一人だけでも助かっただからランと呼ばれたのはどことなく色氣の漂う妙齡の女性。

肩で切り揃えられた銀の髪に鮮やかな緑の瞳。

活動的な性格を表すように、長ズボンに半袖の上着と実際に動きやすい格好をしている。

「ほら、笑って。あなたは精一杯やつてるんだから。それには、あなたは否定するけど、あなたに罪はないのよ。始めに過ちを犯したのは人の欲なんだから。あなたはその犠牲になつただけ」

「ありがとう、ラン。」

微笑むセリナにランは嬉しそうな笑みを浮かべた。
メノの雰囲気も僅かに柔らかくなつた。

「セーリナ」

「ラギ」

突然、声と共にセリナに飛び付いて来たのは、12、3歳ほどの少年。

短い銀の髪に楽しそうな少し垂れ気味の銀の瞳。
見る者が思わず目を細める愛らしい容姿をしている。

「ラギ、急に飛び付かないで。危ないでしょ」「
しゃんと下を向き、ラギは上田でセリナを見る。

瞳を潤ませ、悲しげにする。

「セリナは、僕のこと、嫌い？」

誰もが慌てて否定し、必死に慰めるほど、愛らしく儚げな姿。だが、
セリナ達には通じなかつた。

「そんなこと言つてないでしょ。危ないからやめりつて言つてるの。
だいたい、私にそれは効かないわよ」

呆れたようにセリナは言つた。

「はい」

なぜか楽しそうにラギは返事をした。

「ねえ、セリナ。早くここから出ようよ。お腹すいた」「
ぐいぐいとセリナの腕を引っ張る。

「分かったから、手を離して」

痛いのかセリナは眉をひそめた。

「はい」

セリナの腕を離すと、ぱたぱたと走り出しそう。走りながら、振り返つた。

「僕、先に行つて場所探しておくれ」

返事も待たず、ラギは走り去つた。

「ラギつたら、元気ね。見習わなきゃね」

苦笑するとセリナはぐるっと田に焼き付けるように周りを見渡す。

「行こつか

しばりくしてセリナはメノとランに晴れやかに笑い掛けた。

諦めはしない。自分を許すことも出来ない。それでも一緒に居てくれる者がいる。

だから、笑おう。

仲間（後書き）

人が忘れた罪を一人背負う少女と共に旅するのは、少女に罪無きことを知る者。

悲しき涙（前書き）

亀より遅い更新です。
出来たら、感想を下さい。誤字脱字報告でも構いません。

悲しき涙

闇夜の森の中で焚き火を囲むいくつの人影。その内の1つが横になつており、時折心配そうに覗き込む人影があつた。

「うーん」

横になつていた人影が、話し声に促されるように軽い唸り声を上げる。

「あつ、起きた? ご飯出来てるけど、食べない?」

（だれ、だつけ? それに、布団こんなに堅かつたけ?）

聞き覚えのない声に内心首を傾げ、違和感を感じながらゆっくりと起き上がる。

寝起きで霞む目を擦り、周りを見渡した。

目の前にあるのは、闇を照らす暖かな焚き火。

周りにいるのは、見覚えのない人達に見覚えのない場所。

「ここ、どこお?」

今だ寝起きのいくぶんぼんやりとした頭で尋ねる。

「ここは、森の中よ。ねえ、何があつたか、覚えてる?」

自分よりいくつか年上の、凛とした清廉な雰囲気を纏つた嫌がおうにも目が惹き付けられる綺麗な少女が尋ねてきた。

みとれながら、何があつたけ? と考え出す。

（確か、お祭りだから、母さんとヒナの為に花を、取、りに、行つて）

「あつ、街が焼けてた。竜が、街を襲つ、て」

徐々に記憶が戻つて来る。

焼け爛れた街。

辺りに漂う人の焼ける臭気。

沸き上がる不安と絶望。

そして、自分を見た、竜の濁つた黄色の瞳。

その瞳を目にした途端、体が震え出し動くことが出来なかつた。頭も真っ白になり、ただただ竜の姿に怯えることしか出来なかつた。竜が口を開き、灼熱の炎が迫ってきた時もただ見つめるだけだつた。助かつた後も思い出すだけで、知らず知らずの内に体が震えてくる。震えと共に感じた寒氣に思わず、自分の体を抱き締める。それでも、震えも寒氣も治まらなかつた。

ただただ震える少年の小さく細い体をセリナは切なげに見つめた。未だ成長途中の未発達な少年は、本来なら両親に守られて笑つてくれる筈だつた。

なのに、ほんの一時町に居なかつた、たつたそれだけで守つてくれる両親も家族も亡くしたのだ。

それだけではない。

今まで育つてきたであらう町も人々も全て失つたのだ。

それに、深い絶望と決して人が勝つことの出来ない絶対者に遭遇する恐怖も味わつたのだ。

恐らく、それは生涯少年を事あるごとに苦しめることになるだらう。竜を目にした大人がその恐怖に耐えきれず、正氣を失つることも折角助かつた自らの命を絶つこともあるのだから。

そして、守る者もない少年は、孤独を味わう事になるだらう。

これから先の事を考えるともしかしたら、あの時死んでいた方がたつた一人生き残るよりも楽な事だつたかも知れない。

そんな思いが一瞬セリナの頭をよぎつた。

その考えをしりのぞけるように、一度強く俯きながら首を振る。

そうして、前を見つめた先には自分を強く抱き締め、尚震え涙する少年。

躊躇いがちに、そつと伸ばされたセリナの両腕が少年の体に近づいていく。

伸びた手が少年に触れる事を一度躊躇つた後、ゆっくりと少年の体を抱き締めた。

止まらない震えと恐怖に、耐え切れず狂つてしまいそうになつたその時、暖かな何かが体に触れ微かに甘い香りが広がつた。

その温もりと香りが、冷え切つた少年の体と心に心地よく、ふつと安堵のため息を付いた。

「大丈夫よ、大丈夫。ここに、あなたを傷付ける者はいないわ」

優しい声が耳元で響く。

その声の示す内容がが眞実であると、なぜか疑いもなく確信できた。ああ、ここに竜は居ないんだ。

よつやくそう思つことが出来、今度は安堵の涙が流れ出した。

そうして、ひとしきり涙した後家族や町の人々の事が思い出された。あの惨状を見た後では、助かつてるとは思えなかつた。

自分が助かつた事さえ、奇跡に近いのだから。

何せ、竜に襲われて助かつた者は極僅かしかいないのだ。

ほとんどの場合、生き残るものは居らず、全滅しているのだから。もし、花を摘みにいてなければ、彼も死んでいたのは間違いない。それでも、震えるかすかな声で、一縷の希望を込めて尋ねた。

「母さん達、は

抱きしめる腕に僅かに力が入つた。

それだけで、生き残つてゐるのが自分だけだとわかつた。

それでも、信じたくなくてただじつと少女の顔を見上げた。その視線に、少女の綺麗な藍色の瞳が揺らいだ。

揺らいだ瞳は、すぐに静かな水面のよつに凪いだ。

そうして、静かに紡がれた言葉は少年の希望を打ち碎いた。

「……あの街で生きていたのは、あなた、だけ」

最後の望みが絶たれ、最早溢れ出す涙を止める手立ては少年にもセ

リナにもなかつた。

むせびなく泣き続ける子供を抱きしめる」としか、セリナには出来なかつた。

それでも、謝ることは出来なかつた。

それは、共に旅をしてくれたメノ達の言葉と思いを裏切り、罪のない椿を責めることになるから。

それに何よりもセリナは決めていた。

心の中は謝罪でいっぱいでも、表には出さない。自分の罪は許されるものではないから、と。

謝罪の念を表に出せば、メノ達が否定してくれることは分かつていている。

それが分かつていて尚、自分の罪悪感を薄めるためにだけ口にはすまい、と。

「ありがとう、生きててくれて」

それだけしか、ささやくことが出来なかつた。

少年はセリナの言葉にいつそう声を上げ、泣いた。

泣いて泣いて、目が赤く充血し、瞼が熱を持ち腫れた頃に漸く涙が止まつた。

その間ずっと抱きしめてくれたセリナに、恥ずかしいのか少し頬を赤くし、かすれた声で少年は、礼を述べた。

「…ありがとう」

絶望を味わつても尚、礼を忘れない少年の様子にセリナは思わず微笑んだ。

「気にしないで。それより、喉、渴かない?」

腕の中でこくりと少年が頷くのを確かめる。

あれだけ、泣き続ければ、喉が枯れ声が掠れるのも当然だつた。セリナは顔を上げ、少し後ろを向いた。

そこには、ランが焚き火を背景に座つていた。ランの瞳には、セリ

ナ達を気遣う光が浮かび、心配そうにセリナを見やつていた。

ランの様子にセリナは、全てを慈しむかの様な優しい笑みを浮かべて見せた。

その笑みには、ラン達が心配していたような暗さはなく、釣られる
ように笑みを見せる。

セリナは、ランの笑顔を見ると明るい声を響かせた。

「ラン、白湯に蜂蜜を溶かしたのと濡らした布をさようだい」

「了解」と マリナの話

をなだめる。

それを食い止めていたのは、セリナの悲しむ顔は見たくないという

最もそれも一人が行動に移そうとする度に、ランが宥めたからこそではあるが。

「はい。これで田を冷やして、痛いでしょう?」

「ありがとうございます」

礼を言って受けとつた布は熱を持っていた顔に、ひんやりと冷たく気持ちが良かつた。

悲しき涙（後書き）

目覚めた少年に突き付けられるのは、残酷な現実。
過去に罪を犯せし事を忘れた償いは未だ止まるのではない。

名前（前書き）

更新は不定期で亀より遅いですね。

次回は、今回よりは早くお届け出来るよう、頑張ります！

「ねえ、名前を聞いてもいい？」

はいとコップを渡しながら、セリナが言った。

喉を優しく潤す温かく甘い白湯を飲みながら、コクッと頷いた。

「良かつた。私はセリナ。あっちの無愛想で冷たそうなのがメノ。で。小さいのがラギ。こっちの美人さんはラン」

セリナの紹介の仕方にランは微苦笑し、ラギとメノは更に不機嫌になつた。

だが、そんなことは気にしないセリナは少年に目を戻した。

「僕は、ヤイト」

「ヤイトか。ヤイトって、呼ばすてにしていい？ あつ、私のことも呼ばすてでいいよ」

明るいセリナの声に促されるようにヤイトの顔にも弱々しい笑みが浮かんだ。

それにほつと安心したような笑みをセリナは浮かべた。

「ヤイト、お腹空かない？ ちよつビースープが出来たとこだし。メノが作つたのは、美味しいわよ」

ヤイトから離れ、スープを注いだとしたが、ヤイトの不安そうな表情に気付き、動きを止めた。

ヤイトの恐怖は近くに人のぬくもりがあることで緩和されていた。一瞬、悲しげな笑みを浮かべると、セリナはヤイトの隣に座り直した。

「ラン。スープ二人分ちょうどいい。足、痺れちゃった」

セリナが座り直すとヤイトは嬉しそうに安心したように笑つた。

「りょーかい」

ランがヤイトに手渡した具がたつぱりと入ったスープは確かに美味しそうだった。

ゆらゆらと温かな湯気が立ち上り、いい匂いが鼻を擡る。

朝から何も口にしていなかつたヤイトは、思わず「ぐぐ」と喉を鳴らした。

だが、セリナを初め、ラン達が未だに食べて無いことに気付き口を付けられなかつた。

「遠慮しないでいいよ。ヤイトはお客様なんだから。それにまだたくさんあるんだから」

皿を抱えたまま、食べようとしたしないヤイトにセリナは声をかける。それでも、口を付けようとしたしないヤイトをみて、先にスープを食べ出した。

美味しそうに食べるセリナにつられて、ヤイトも食べ始めた。

「……美味しい」

「でしょう? メノの特技はこれだけだもの」

ホツと安心したような晴れやかな笑みをセリナは浮かべた。

「…悪かつたな」

少し不貞腐れたような声が炎の向こうから聞こえてきた。

メノの様子にくすくすと笑いながら、セリナはメノをなだめにかかつた。

「褒めてるのよ? メノ。私はあなたの作つてくれた料理が一番好きよ

「……それなら、いい」

焚き火に更に薪をたすメノの顔は僅かに赤くなつていた。それが、火の照り返しで無いことに気付いたランがふつと吹き出し、笑い始めた。

名前（後書き）

命まで失いかけた少年。

それを救つたのは、人間から裏切られた少女。

勝敗（前書き）

今年初の更新です。

今年は、去年よりは多く更新していくつもりです。
目標は、最低月一です。

頑張りたいです。

「あつはは、相変わらず、メノは可愛いわね。セリナにだけよね~、そんな可愛い反応するのわ」

ギロツと冷たい目で睨んでくるメノを恐れることなく、ランは笑い続ける。

「しようがないよ、ラン。メノはまだまだ子供なんだから。からかつたら、ダメだよ」

堪えきれない笑みを浮かべながらも、ラギがメノを庇う、よつに見せかけ、からかう。

「だつたら、笑うなラギ。第一、俺は子供じやない」

憮然とした不機嫌の声にますますランとラギの笑いは深くなる。

「知つてる? メノ、子供ほどそんな事言つんだよ?」

ラギは笑いながら、更にメノをからかう。

端から見れば無表情のメノだが、セリナ達からしてみれば、口惜しそうにしてる事が良くわかる。

「やられたわね、メノ。お姉さん達に勝とうなんて、まだまだ無理ね、その調子じや」

ニヤニヤとからかつてくるランにボソリとメノが呟いた。

「誰が姉だ。いい年だらうが」

小さく呟いたに過ぎなかつたが、それを聞き逃すランではなかつた。

「ふ~ん、メノつてば、そんなこと思つてたのね」

につこりとそれこそ何も知らなければ、極上の笑みをとしか思えな笑みでランは笑つた。

そう、何も知らなければ思わず魅とれてしまつ綺麗な笑み。

だがそれは、知る者が見れば、ランの怒りの表情でしかない。

「あ~あ、御愁傷様。メノつてば、墓穴掘る癖、直しなよ。どつせ、勝・て・な・い・んだし」

からかうラギの言葉にメノは答えるどつせではなかつた。

「さあ、メノ。覚悟はいいわね。どうしてあげようかしらね」
にこりと更に笑みを深くしながらも、その細い手は、パキパキと恐ろしい音を立てている。

表情は変わらないメノだが、顔は青ざめ脂汗が流れている。
セリナに助けを求めるよつとするが、その前にガシッとランの両手がメノの顔を掴んだ。

「さあ、メノちゃん。お・姉・せ・んと一緒に楽しく遊びましょうか？」

全身を震わせ、必死に逃げようとするメノだが、体格では劣るランの手がガツチリとメノの顔を掴み動くことが出来ない。

暴れるメノに何を思ったのか、ニイニイ「コ」とメノの顔を覗き込むよつにランは笑つた。

そして、優しげな声でメノの耳元で囁いた。

「心配しなくても、大丈夫よ。一生のトラウマになるべからず、楽しい思いをさせてあげる」

ランの言葉が聞こえたのか、ラギも楽しそうな笑みを浮かべた。

「良かつたね、メノ。うらやましこよ

「だつたら、代わつてやるよ」

メノの切羽詰まつた声には、ラギは実に楽しそうに首を振つた。

「残念だけど、僕なんかにメノの代わりは務まらないよ。若輩者だからね、僕は。まあ、セリナ達の事は心配しなくていいから、思う存分楽しんで来てよ。僕は留守番してるからさ」

「そうよ。観念しなさい、メノ。今夜は寝かせないわよ。」

フフフ、と楽しげな笑いと共にランはメノの首を掴み、何処かに去つていく。

一点の曇りもない無邪気そうな笑顔でラギは一人を見送る。

「いってらっしゃい、楽しんで来てね」

「お土産、楽しみにしててね」

「いじで、それまで黙々とスープを飲んでいたセリナが遠ざかって行

く一人に声をかけた。

「明日は、朝早いから早めに帰つてくるよ。遅れたら、置いていくからね」

セリナの声が聞こえたのか、ランが遠くで手を振つてるのが見えた。

「これで、よしつと」

「一つ頷くと、呆気にとられているヤイトにセリナは、笑いかける。「気にしなくて大丈夫よ、ヤイト。ランは加減を知つてゐるから。それに、いつもの事だしね」

どこか呆れたように言つセリナに、ラギも苦笑する。

「しようがないよ。メノは、まだまだ子供で墓六掘る性格だからね」

ラギの答えにセリナも苦笑する。

二人の会話にヤイトも釣られて苦笑する。

ヤイトがスープを食べ終わつたことを確認すると、軽くセリナは背を伸ばした。

「二人とも今晩は帰つてこないし、ヤイトも疲れただろうし、もう寝ようか」

それにこくりとヤイトも頷いた。

「じゃ、寝る準備しておくから、ヤイトは茶碗片付けてくれるかな？」

ラギの声に頷くと、茶碗と明かりを持つてすぐ近くの川にヤイトは向かつた。

勝敗（後書き）

精神と外見は同じ時を過ぎます。
されど、同じように成熟していく訳ではない。

竜も人も。

垣間見えた本音（前書き）

初っぱながら、目標を破りすみません。
もひひょつと頑張りたいです。
待つて下さった方、本当にすみません！

垣間見えた本音

「で？」

「何？」

寝床の準備をしながら、セリナは不機嫌そうにとぼけのラギを睨みつけた。

「何か言いたいことがあるから、ヤイトを行かせたんだしじょう。わざわざ一人になるのを怖がってる子を！」

セリナの言葉にラギは、不思議そうな表情を浮かべる。

「そう？ あの子、素直に行つたよ？ 怖がってる風には見えなかつたけど？」

ラギの言葉にセリナは棘を含んだ声を出す。

苛立ちを表す様に寝床を用意する動きも荒立たしい。

「今日会つたばかりの、しかも迷惑を掛けたと思つてゐるあの子が！ 私達の頼みを断る訳ないじやない！ そこまで分かつてて頼んだんでしょう！ はぐらかさないで！」

セリナの言葉にラギはそれまでのからかうよつた態度と明るい表情を一変させる。

その愛らしさに顔に一切の表情を浮かべず、感情を含まない冷たい声でラギは言う。

「分かつてゐるんでしよう、セリナ」

「……」

顔をしかめたまま俯いた、セリナの沈黙が答えた。

「・・・・・ヤイトをどこまで連れて行くのか、でしよう」

自分が答えるまで沈黙が続く事に耐えきれず、か細い声でセリナは呟く。

それに、ラギは正解だと呟つよつに無邪気な天使のような笑顔を浮かべる。

そして、唐突にぎゅっとセリナの背中にラギは抱きつぶ。そのままの体勢で、ラギはセリナの耳元でどこまでも優しく甘い声で囁く。

「セリナ、あんな子とつとつに放り出せばいいじゃないか。あの子を見るたびに、セリナは苦しむでしょう？ セリナが出来ないなら、僕がしてあげるよ」

「ラギ」

ラギの言葉にセリナは悲しげに名を呼ぶ。

セリナの声にラギは可笑しそうに笑う。

「セリナが苦しむ必要はないんだよ。悪いのは、全部人間なんだからね」

ラギは、最後の言葉にだけ限りない憎しみを込める。

改めてラギの憎しみと怒りの深さを感じ、数瞬セリナは言葉を失う。「ぐり、と無理やり喉を潤すと、僅かに掠れた声がなんとか出た。

「…私も人間よ、ラギ」

セリナの言葉にラギは更に可笑しそうに笑う。

「セリナは確かに人だよ。だけど、君は、君だけが誰よりも竜に近しき者だよ。そして、竜を狂わせたのは、君じゃない」

完全にセリナの手は止まっていた。

「竜を狂わせたのは…私だよ、ラギ」

セリナの細い声に宿るのは、決して消えることのない罪への自責の念。

「君に罪はないよ。君にだけはね。罪深きは、全てを忘れ、被害者ぶる人間だよ」

「でも！」

ラギの声を振り払つよつにセリナは首を振り、言葉を続けよつとする。

だが、すつと背中から暖かな重みが消え、寒さを感じた。

それがセリナには堪らなく寂しく感じられた。

「早く、寝床作っちゃおう、セリナ」

さっきまでの甘い声とは違う、子供らしく高めの明るい声がセリナを促す。

「そうね」

それにセリナも頷き、止まっていた手を動かす。

ラギの態度にヤイトが近くまで来ていることを悟ったからだ。

やがて、寝床が出来上がりかけた時にヤイトの足音が聞こえ、ヤイトの姿が現れた。

「遅くなつて、すみません」

「そんなことはないわよ。寧ろ、早いぐらいよ。まだ、寝床も作り終わつていないわよ」

息を切らせながら、勢い良く姿を表したヤイトにセリナは笑い掛けた。

責める様子のないセリナの様子に、ばれないようにヤイトはさつと安堵のため息をついた。

ヤイトにとって、暗い森の中で一人になることは怖くて仕方がないことだった。

それでも、自分を助け世話をしてくれたセリナ達からの頼み事を断るなど考えられなかつた。

けれど、少しでも一人でいる時間を減らす為に急いで茶碗を洗つた。暗い森の事を考え無いようにしてじるといふと、ふと疑問が沸き上がつて来た。

（あの時、どうして僕は死なずにすんだんだろう？あの竜の火は、間違いなく僕を日掛けていたのに）

ヤイトの記憶は、竜がその大きな口を開け火を吐く所で途切れていった。

その為、自分が傷一つなく助かつた事が不思議で仕方がなかつた。だが、セリナ達にその事を尋ねる気にはなれなかつた。

聞けば、何かが終わってしまうような気がして。

（助かつただけでも、有難いことだしね）

ヤイトはそう、無理やり自分を納得させていた。

そんな事を考えている内に数が少ない事もあり、茶碗を洗い終わっていた。

駆け足でセリナ達の所に戻る。

木々の隙間から、こぼれ見える焚き火の灯りにほっと安堵の溜め息がこぼれた。

街を焼き払った恐ろしい火ではあつたが、ヤイトの中に火への恐れはない。

それは、より大きな竜への恐怖心に打ち消されていた。

安堵の思いは、セリナ達の顔を見た時に更に強くなつた。

ヤイトが溢した溜め息に気が付かないふりをし、セリナはヤイトに完成した寝床に入るよう促した。

「ヤイト、もう遅いから寝なさい。今日は、色々あつたから疲れでしょう」

セリナの言葉通り、ヤイトは疲労を感じていた。

しかし、セリナの言葉に従つて休む気にはなれなかつた。

（でも、さつきまで休ませてもらつたし、見張りとかも必要だよね？それに、寝たら…）

考え込むヤイトの様子にセリナは少し悲しげな笑みを浮かべる。

ヤイトが寝るのを恐れる気持ちも分かるからだ。

だからといって、ヤイトの疲労も分かるだけに寝てもらわないと困りがない。

明日は、次の町には着くまで歩き続ける事になる。その為にも体力の回復は欠かせない。

それでも、セリナはヤイトを急かす事もなく見守っていた。

「…セリナさん、僕はまだ大丈夫です。眠くないですから、先に休んで下さい。その間、火の番をしますから」

「セリナで構わないわ、ヤイト。ヤイトの気持ちは嬉しいけど、駄目よ。寝ないと体が持たないわ。次の町まで歩き続けなきゃいけないんだから」

「でも、」

尚も躊躇いを見せるヤイトにラギが天使のよつたな笑顔を浮かべ、寝るよう促す。

「ヤイト、火の番は僕がするから、君は休んで。明日は早田に出発する予定だから」

しかし、ヤイトは自分と同じくらいの少年に言われて素直に頷けず、眠ろうとはしない。

動いつとしないヤイトにラギは内心腹立たしくて仕方がない。

その表情には現れていないラギの不機嫌そうな様子に、セリナは小さなため息を溢す。

そして、ヤイトの手を掴むとグイッと引き寄せた。

「わあっ！」

「ヤイト、今日はまず休んで。私も一緒に寝るから。火の番を交代する時に起こすから、それでいいって事にして、ね」

自分の体の上に引っ張り倒したヤイトの背中をポンポンと宥めるようにセリナは呟く。

その温かさに、知らず知らずの内に強張っていた体がふつと緩む。力が抜けたのを感じると同時に眠気がゆっくりと押し寄せてくれる。

「一緒に、寝よう。ヤイト

セリナの優しい声と温もりにあがえない程眠気が強くなる。

セリナに子供扱いされるのが心地よくて、抱きしめられたままヤイトの皿はゆっくりと閉じられていく。

安らかな寝息がヤイトから聞かれると、セリナは安堵の吐息を溢す。

「良かつた」

「何処が？セリナ、とつととその子を離しなよ」

不機嫌なラギの様子に苦笑しながらセリナはそつとヤイトを自分の横に寝かせる。

温もりが離れたことにヤイトは顔をしかめる。だが、セリナが手を握ると再び穏やかな表情に戻った。

その寝顔を見ながら、セリナも横になる。

「ラギ、悪いけど火の番お願ひね」

「分かつてるよ」

機嫌のなおらないラギにそつとセリナが呟く。

「おやすみなさい、ラギ。大好きよ」

セリナの言葉にピクリとラギの肩が揺れ、ついで小さく返事が返つてきた。

「おやすみ、セリナ」

それにセリナは嬉しそうに微笑むと、目を閉じた。

やがて、一つの安らかな寝息が聞こえ始めた。

ラギはユラユラと揺れる炎を見つめながら、呟く。

「反則だよ、セリナ」

ラギの頬は、炎の照り返しよりもなお濃い赤色に染まっていた。

垣間見えた本音（後書き）

決して消える事のない自責と憎しみ。

全ての始まりは、人が罪を犯した口と憎しみ抱く者は呟く。

自責せし者は、口の存在だと呟く。

朝（前書き）

かなり久しぶりになってしましました。
待っている方がいらっしゃれば嬉しいです！

楽しげな鳥の鳴き声に促される様にヤイトの目がゆっくりと開いていく。

数度、眩しさに耐えきれず瞬いた後昨日までの事を思いだし、ヤイトは思わず硬く目を閉じた。

ヤイトは心の中で、昨日の出来事が夢であるよつと強く願う。だが、辺りに響く鳥の声も体に触れる柔らかな風や布も全てが今までの物とは違う。

あらゆるもののが昨日の事が夢ではないと、ヤイトに訴える。何時も自分を起こしてくれた父の声も朝食を作る母と甘える妹の声も聞こえない。

それ故に昨日までの自分の世界が壊れ、孤独になった事実がヤイトを打ちのめす。

堪えきれずに閉じた瞳から涙が零れ落ちる。

「ヤイト」

優しい声がヤイトの名を呼び、温かい指が涙を拭う。

その声と温かさに促されるよつにヤイトは、そろそろと目を開く。

「ヤイト、朝御飯出来たんだけど、まだ寝とく?」

涙の事には触れずにいてくれるセリナの優しさが、ヤイトには嬉しかった。

ヤイトは更に泣きそうになりながら、首を振る。

「大丈夫、起きるよ。」

寝起き以外の理由で掠れた声にセリナは何も口にしない。

ポンポンと、軽く毛布の上から叩くと、セリナが離れていく音がした。

セリナの声と温もりが、ヤイトに一人つきりではないと教えてくれる。

込み上げる熱い何かを必死に呑み込むと、ヤイトは起き上がった。

「顔を洗つてらっしゃい、ヤイト。私も一緒に行くから。すつきりするわよ」

セリナの声にヤイトは、ゆっくりと頷く。

焚き火に向かおうとしていた足を、すぐ近くの川に向ける。ヤイトの後ろでセリナが付いていこうと立ち上がる。うつとすると、

それをラギがセリナの肩に手を掛け、押し留める。

「いいよ、セリナ。僕が行くから。セリナは、朝食の準備をしてて」「けど」

セリナはラギの人に対する憎しみを知っているから、ヤイトと二人きりにすることに躊躇いを覚える。

セリナの懸念に気付いたラギが宥めるように笑い、耳元で囁く。

「大丈夫だよ、セリナ。あの子を殺したりはしないよ。あの子がセリナを傷つけない限りね」

（あいつが、セリナを傷つけても、簡単に殺しはしないさ。散々苦しんでもらわなきゃ、罪は償えないんだからね）

「ごめんね。セリナには朝食の準備があるから、僕が一緒に行くよ」先の方で待っていたヤイトにそう言つてラギはにっこりと笑う。最初の言葉以外黙々と歩くラギに、ヤイトは気詰まりを覚える。ヤイトとしては、出来ることならラギと仲良くしたかった。

自分を助けてくれた人達であるから、当然好意はある。

それを抜きにしても、同い年の少年であるから打ち解けたいという

思いも大きい。

だから、チラチラとラギの様子を伺い、何度も声を掛けよつとねする。

だが、ヤイトの視線を感じても一切反応しないラギの様子に「」もつてしまつ。

気詰まりに急かされるよつて、ヤイトは速足になつて行く。
よつやく、川が見えると知りずくに安堵のため息をついていた。

川で顔を洗い、戻りよつとしたヤイトにラギが口を開く。

「ねえ、君は竜を恨んでる?」

ラギの質問が唐突過ぎて、ヤイトが質問の意味に気付くのにくばくかの時間を必要とした。

ラギの質問を理解すると、ヤイトは反射的に答えていた。

「当たり前です。竜を来なれば、皆はまだ生きてたんだから」反射的に口にした答えに、ヤイトは己の抱く恨みに気付かされた。

同時に、復讐が無意味である事もヤイトには分かっていた。

あの時、竜と対峙したヤイトだから竜の恐ろしさは十分に知つていた。

あれは人が勝てるものではない、とヤイトの本能が告げるのだから。自分が助かったのは、正に奇跡と言える事も分かつていた。

だから、ヤイトを拭いがたい無力感と敗北感が襲う。
何も出来ない自分が、情けなくて。

それに、ヤイトは怖いのだ。

自分がもう一度、竜の前に立つ事を考えると、自然と体が震え出す。家族の仇を討ちたいといつ思つよりも、なおヤイトに根付いた竜へ

の怖れは大きく深い。

あの、自然の脅威が形を取つた竜が、絶対者として君臨する竜が。

(・・・)・わい。怖い、怖い・・・誰か、助けて)

竜への恨みを口にしながら、その脅威に顔面蒼白になり震えるヤイトをラギは冷ややかな目で見る。

ヤイトの反応は、ラギの予想通りだつた。

わざわざセリナから離れた場所で聞いたのは、セリナを傷付けたくなかつたからに過ぎない。

そう、ラギはヤイトを手に掛ける気などなかつた。

そうする価値すら見い出せないからだ。

ラギにして見れば、ヤイトなどどうでもいい存在だ。

実際、ヤイトが今ここで死んでもラギは眉一つ動かさない。最も、セリナが悲しむから、渋々とが助けるだらうが。

ラギが最優先するのは、大切にするのはセリナのみなのだから。ラギの判断基準は、ひどく分かりやすい。

セリナが傷付くか否か。

それだけなのだから。

セリナが傷付くと分かれば、ラギは即座に原因の排除にかかる。セリナが、目の前で止めない限りは。

今のところ、良くも悪くもヤイトは想定の範囲内の反応しかしない。それは、セリナを傷付けるものではないから、ラギは歯牙にもかけていない。

もし、ほんの少しでもヤイトがセリナを傷付けるのなら、ラギは躊躇いもなく排除するだらうが。

「もうここのよ。もう一回、顔でも洗つたら、そんな顔で帰つたら、セリナが心配するから」

ラギの冷たい、どこまでもセリナ至上の声が未だ涙を流し続けるヤイトの耳を打つ。

未だ恐怖に震えていたヤイトは、のろのろとラギの言葉に、顔を洗い始める。

その身を蝕む恐怖が大き過ぎて、ヤイトは何も考えられなかつた。だから、冷たいラギの声にも何の反応も示さず機械的に従つたに過ぎない。

ふん、と少しく鼻を鳴らすとラギはよう一層冷たい視線をヤイトに向ける。

慰める気など一切ないラギは、ヤイトの涙が止まつたのを確認するときわど歩きだした。

ヤイトも覚束ない足取りで、ラギに従つ。

「言つとくナビ、セリナの前でそんな顔するのは、止めてね。セリ

ナが心配するから。君はお荷物なんだから、心配なんて掛けないで
ね」

あと少しでセリナの所に辿り着く。

そんな場所で、ラギは急に立ち止まる。

そして、ヤイトの顔を冷ややかに見ながら、本心を告げる。

それにびっくりとヤイトは体を震わせた。

朝（後書き）

苛む恐怖こそ人が犯した罪が作りしもの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8488b/>

竜に愛されし鎮め姫

2010年10月11日23時48分発行